

## 「真理の御霊」

ヨハネの福音書 13:30~14:17

はじめに

13:30 ユダは、パン切れを受けるとすぐ、外に出て行った。すでに夜であった。

イエシュアが十字架にかかれるその前夜、イスラエルの三大例祭の一つである過ぎ越しの祭りを祝う食事の席で、イエシュアは弟子たちの足を洗われました。その中で弟子の一人であったイスカリオテ・ユダの裏切りが明らかにされます。しかしイエシュアはそんなユダに対して最後まで愛を示し続けましたが、彼はイエシュアではなくサタンを受け入れ、イエシュアのいのちを狙うユダヤ人の指導者たちにイエシュアを引き渡すために、自らイエシュアのもとを離れ、出て行ったのでした。

### 1. 栄光

13:31 ユダが出て行ったとき、イエスは言われた。「今こそ人の子は栄光を受けました。また、神は人の子によって栄光をお受けになりました。

13:32 神が、人の子によって栄光をお受けになったのであれば、神も、ご自身によって人の子に栄光をお与えになります。しかも、ただちにお与えになります。

「ユダが出て行ったとき、イエスは言われた」とあるように、これからイエシュアが語られることは、イエシュアを信じない者、受け入れない者には決して明かされない、イエシュアを信じ受け入れる者、弟子たちにもみ語られる限定メッセージであると考えられます。ここでは御父である神様と、人の子すなわち神様の御子であるイエシュアが、それぞれ「栄光」をお受けになることが示されています。この「栄光」とは一体何でしょうか。まず読み取れる事としては、「栄光」とは、「与えられるもの」「受けるもの」であるということです。つまり自分自身で獲得したり、また誰かから奪い取ったりするものではないということです。そして御父は、「御子によって」栄光をお受けになり、一方御子は「御父によって」栄光をお受けになることが記されています。このように御父と御子とは、「栄光」を与え合う関係だと言えます。栄光はヘブル語でカーヴォード(קָוֹד)、動詞はカーヴァド(קָוַד)と言い「重い」という意味があります。これが聖書で最初に使われるのが創世記 18:20 です。

### 創世記

18:20 そこで主は仰せられた。「ソドムとゴモラの叫びは非常に大きく、また彼らの罪はきわめて重い。

このように、本来カーヴァドは罪が「重い」ことを表すための言葉です。つまり「栄光」を受けるとは、罪を背負うことだということになります。そしてこのソドムとゴモラの町がそうであったように、滅ぼされるということです。ですから人の子に栄光が与えられるとは、イエシュアがイスラエルと、またそれにつながる異邦人のすべての罪を背負い、殺されることを意味していると考えられます。それはすなわち十字架です。「ユダが出て行った」裏切ったことによりそれが「ただちに与えられる」、起ころうとしていることが示されている

と考えられます。

そしてこの十字架によって御父である神様がお受けになる「栄光」とは、イエシュアが十字架にかかれて死ぬことは御父の御意志によるもの、御心、み旨によるものです。つまり御父は御子に、罪のないご自分のひとり子に罪をかぶせて死なせるという大罪を犯すということです。罪を犯すと言っても人間が犯すそれとは全く次元が違います。神様は罪と死を滅ぼし、永遠の御国を建て上げるために、そしてそこに住まうべき人々への愛のゆえにこのことをなさるのです。ですからこれを罪と呼ばずに「栄光」と呼ぶべきであると思われま

## 2. 子どもたちよ

13:33 子どもたちよ。わたしはいましばらくの間、あなたがたといっしょにいます。あなたがたはわたしを捜すでしょう。そして、『わたしが行く所へは、あなたがたは来ることができない』とわたしがユダヤ人たちに言ったように、今はあなたがたにも言うのです。

ここでイエシュアは初めて弟子たちから離れて行かれること、弟子たちはついて来ることができないことを明言されます。そんな弟子たちに対してイエシュアは「子どもたちよ」と呼んでおられます。この呼び方はヨハネの福音書では珍しく、この箇所とあともう一箇所でしか使われていません。そのもう一箇所とはヨハネ 21:5 です。

### ヨハネ

21:4 夜が明けそめたとき、イエスは岸べに立たれた。けれども弟子たちには、それがイエスであることがわからなかった。

21:5 イエスは彼らに言われた。「子どもたちよ。食べる物がありませんね。」彼らは答えた。「はい。ありません。」

この箇所はイエシュアが十字架の死から復活されて後、三度弟子たちの前に現れる場面です。ここでも同じようにイエシュアは弟子たちと食事をともにされます。「子どもたちよ」とは食事をともにする子どもたちですから他人の子どもではなく同じ家族、神様の「わたしの子どもたち」であるということです。その呼びかけが 13:33 とこの 21:5 を結んでおり、たとえ離れても、必ず再会できることを表していると考えられます。

## 3. 新しい戒め

13:34 あなたがたに新しい戒めを与えましょう。互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。

イエシュアはここで互いに愛し合うことを「新しい戒め」と言われました。しかし愛することのどこが新しいのでしょうか。律法にはすでに「あなたの神である主を愛せよ」また「隣人を愛せよ」という御言葉が大切な、第一の戒めとして記されています。

## マタイ

22:37 そこで、イエスは彼に言われた。『心を尽くし、思いを尽くし、知力を尽くして、あなたの神である主を愛せよ。』

22:38 これがたいせつな第一の戒めです。

22:39 『あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ』という第二の戒めも、それと同じようにたいせつです。

ではなぜイエシュアは愛し合うことを「新しい戒め」と言われたのでしょうか。ここで注意すべき点は「わたしがあなたがたを愛したように」、すなわち「イエシュアが弟子たちを愛したように」愛するということであり、また御父と御子は一つですから「神様が神様を信じる者を愛するように」愛するということでもあります。つまり人が神様を、また人を愛する愛と、神様が人を愛する愛とは異なったものであるということです。ヘブル語で「愛する」ことを意味する言葉はアーハヴ(אהב)ですが、それが最初に使われるのは創世記 22:2 です。

## 創世記

22:2 神は仰せられた。「あなたの子、あなたの愛しているひとり子イサクを連れて、モリヤの地に行きなさい。そしてわたしがあなたに示す一つの山の上で、全焼のいけにえとしてイサクをわたしにささげなさい。」

しかしここに記されているアーハヴ「愛する」は、アブラハムが息子イサクを愛する、父が子を愛すること、人が人を愛することを意味するアーハヴであり、神様が人を愛することを示したものではありません。では、神様が人を愛することを最初に記した箇所はどこでしょうか。それは申命記 4:37 にあります。

## 申命記

4:37 主は、あなたの先祖たちを愛して、その後の子孫を選んでおられたので、主ご自身が大きいなる力をもって、あなたをエジプトから連れ出された。

またアーハヴの名詞形、アハヴァー(אהבה)「愛」が聖書で最初に記されている箇所も同じく申命記で、7:8 になります。

## 申命記

7:8 しかし、主があなたがたを愛されたから、また、あなたがたの先祖たちに誓われた誓いを守られたから、主は、力強い御手をもってあなたがたを連れ出し、奴隷の家から、エジプトの王パロの手からあなたを贖い出された。

これらはイスラエルの民に対して語られたものです。このように、神様が人を愛する愛は動詞のアーハヴにしても名詞のアハヴァーにしても指し示す内容が同じであることが解ります。すなわちイスラエルの先祖であるアブラハムを選び出し、彼に対して神様が誓われた誓い、契約のゆえにイスラエルの民を奴隷の状態から救い出すことです。つまり神様が人を愛するとは、イスラエル、アブラハムの子孫が神様に選ばれた民であり、彼らに対する契約を成就する、成し遂げることを指し示していると考えられます。

13:35 もし互いの間に愛があるなら、それによってあなたがたがわたしの弟子であることを、すべての人が認めるのです。」

人は誰も愛を持っています。それは人が人を愛する愛であったり、もしくは自己愛、自分自身を愛する愛であったりしますが、すべての人が持っているこの愛では「わたしの弟子」イエシュアの弟子であることを、すべての人に認めさせることはできません。イエシュアが語られた「新しい戒め」としての愛は、「神様が人を愛する愛」であり、それはイスラエルの先祖であるアブラハムに与えられた契約を指し示すものであり、それを成し遂げることが神様のご計画であることを示すものです。

#### 創世記

12:1 主はアブラムに仰せられた。「あなたは、あなたの生まれ故郷、あなたの父の家を出て、わたしが示す地へ行きなさい。」

12:2 そうすれば、わたしはあなたを大いなる国民とし、あなたを祝福し、あなたの名を大いなるものとしよう。あなたの名は祝福となる。

12:3 あなたを祝福する者をわたしは祝福し、あなたをのろう者をわたしはのろう。地上のすべての民族は、あなたによって祝福される。」

神様のアブラハムに対するこの契約、計画を信じ、受け入れ、その成就、実現を待ち望む者たちが集まること、それがすべての人が「彼らはイエシュアの弟子だ」と認める「互いの間に愛がある」ということの真意だと考えられます。

#### 4. 鶏が鳴くまでに

13:36 シモン・ペテロがイエスに言った。「主よ。どこにおいでになるのですか。」イエスは答えられた。「わたしが行く所に、あなたは今はついて来ることができません。しかし後にはついて来ます。」

13:37 ペテロがイエスに言った。「主よ。なぜ今はあなたについて行くことができないのですか。あなたのためにはいのちも捨てます。」

13:38 イエスは答えられた。「わたしのためにはいのちも捨てる、と言うのですか。まことに、まことに、あなたに告げます。鶏が鳴くまでに、あなたは三度わたしを知らないと言います。」

イエシュアがペテロに「今はついて来ることができない」と言われました。イエシュアのためなら死んでもいいときえ言う彼に対して「鶏が鳴くまでに、あなたは三度わたしを知らないと言います」と宣言されました。イエシュアがペテロに対して言われたこの二つの言葉は対句になっており、同じ内容のメッセージを言い換えながら二度繰り返して強調しておられるのです。つまり「今は…」が「鶏が鳴くまでに…」に言い換えられているのです。「鶏が鳴く」とは夜明けを知らせる表現ですから「鶏が鳴くまでに」とは夜のうちに、今夜中ということなのです。ユダが出て行った 13:30 で「すでに夜であった」と記されていたから、その時がもう間もなく、まさに「今」と言うことができます。そして「…ついて来ることができない」と「三度わたしを知らないと言う」が言い換え表現になっています。この「三度」とは神様の御前に立つ、神様と交わることを意味する表現です。

## 出エジプト

23:14 年に三度、わたしのために祭りを行わなければならない。

23:17 年に三度、男子はみな、あなたの主、主の前に出なければならない。

## ダニエル書

6:10 ダニエルは…いつものように、日に三度、ひざまずき、彼の神の前に祈り、感謝していた。

このように、「三度」とは神様の御前に近づき、礼拝すること、祈ること、神様と関係を持つこと、しかも選ばれた、特別な関係を意味すると考えられます。ペテロはこれを「知らない」と言って、イエシュアとの関係、交わりを否定することがイエシュアによって語られたと考えられます。その宣告を受けたペテロは大いに動揺します。そしてその動揺は彼だけでなく、そのやり取りを見ていた弟子たち全員にも表れます。ですからイエシュアは次にこう言われるのです。

## 5. 信じなさい

14:1 「あなたがたは心を騒がしてはなりません。神を信じ、またわたしを信じなさい。

ペテロは「イエシュアのためならいのちも捨てる」と言いましたが、イエシュアは一度もそんなことを弟子たちに命じたことも求めたこともありません。重要なことは神様を、イエシュアを「信じる」ことだと語られました。そもそも私たちが「イエシュアのためにいのちを捨てる」のではありません。「イエシュアが私たちのためにいのちを捨てる」のです。それが十字架であり、そしてそれによって私たちは神様との関係をもつことができるようになり、イエシュアに「ついて行くことができる」ようになるのです。

14:2 わたしの父の家には、住まいがたくさんあります。もしなかったら、あなたがたに言うておいたでしょう。あなたがたのために、わたしは場所を備えに行くのです。

14:3 わたしが行って、あなたがたに場所を備えたら、また来て、あなたがたをわたしのもとに迎えます。わたしのいる所に、あなたがたをもおらせるためです。

イエシュアは「神を信じ、またわたしを信じなさい」と言われましたが、「信じる」とは、何らかの行為、行動によって起こる、成し遂げられる「結果」に対して向けられるものです。ですから神様を、イエシュアを信じるとは、神様が、イエシュアが成し遂げてくださる出来事、実現してくださるご計画が何であり、どのような事であるのかを知っていなければ、理解していなければ、「信じる」という行為が理屈として成立しません。ですからここでイエシュアは、その信じるべき結果、出来事について述べておられるのです。つまりそれはイエシュアとともに住む「場所」が用意されるということです。これを「信じなさい」と言うておられるのです。

御父である神様の御許で、イエシュアは今、私たちを迎える「場所」を準備してくださっているのです。そしてその準備が完了次第、私たちを迎えに来られます。それはまるで花婿が花嫁を迎えに来るようなものです。実はこの私たちが信じるべき「出来事」は、当時のイスラエルでならわしとされていた結婚における風習と密接な関係があります。当時のイスラエルでは、結婚が決まった、すなわち婚約が成立した男女は一旦離されました。そして花婿となる男性は実家に戻り、父親の監督の下、花嫁を迎える家を建て、新生活の基盤となる畑

を開墾したりして結婚生活の準備を始めるのです。そしてその準備が整い、父親の許可を得て、晴れて結婚となり、花嫁となる女性を迎えに行くのです。ですからこのならわしを知っているイスラエルの民、ユダヤ人であるならば、花婿がしばらくの間花嫁のもとを去って、自分の父の家に帰るといのは、婚約が成立し、もはや結婚が決定的なものとなったことを示し、それは「心を騒がせて」悲しむどころか、逆に大いに喜ぶべきことであり、花婿を迎えに来るその瞬間を、すなわちイエシュアが迎えに来てくださる日を、指折り数えて今日か明日かと待ち焦がれることなのです。

そしてイエシュアが「また来て…迎えます」と言われるように、私たちイエシュアを信じる者たちを「迎えに来られる」ことが記されています。「迎えに来る」とは、迎える者が来て、ともにどこか別の「場所」に連れて行かれることを意味します。ここでイエシュアはあえて「場所」を備える、また「場所」に迎えると言われ、家や国などの永遠の住まいとしての神様の国、御国とは明らかに違う存在であることを強調しておられます。なぜなら御国はこの地に来る、すなわちこの地上に建てられるものであり、どこか別の場所にあつてそこに行くというようなものではないからです。

#### マタイ

6:9 だから、こう祈りなさい。『天にいます私たちの父よ。御名があがめられますように。

6:10 御国が来ますように。みこころが天で行われるように地でも行われますように。

ではイエシュアが備えておられ、また私たちを迎えてくださる「場所」とは一体何でしょうか。この「場所」を意味するヘブル語はマーコーム(מֶקוֹם)と言います。このマーコームが聖書に初めて登場するのは

#### 創世記

1:9 神は仰せられた。「天の下の水が一所に集まれ。かわいた所が現れよ。」そのようになった。

この箇所は天地創造の第三日目、海と陸が分けられるところですが、ここで水が「一所に集まる」という部分にマーコームが使われています。このように、マーコームとは単なる場所を示すだけでなく、かわいた所すなわち地から別れ、区別されて一つの場所に集められることを指し示しています。

またマーコームは、クーム(קוּם)「立つ、起きる」という意味を持つ動詞からなっています。このクームが初めて使われる箇所は創世記 4:8 です。

#### 創世記

4:8 しかし、カインは弟アベルに話しかけた。「野に行こうではないか。」そして、ふたりが野にいたとき、カインは弟アベルに襲いかかり、彼を殺した。

これはアダムの息子カインが、弟のアベルを殺害するという恐ろしい場面ですが、ここで二人が野に「いた」、立っていたという言葉がクームです。このようにクームとは、二人の者がともに行き、一つの場所に「二人っきり」でいることを指し示しています。この「二人っきり」になることを、花婿と花嫁の関係に当てはめるな

らば、これも当時のイスラエルの結婚の風習とのつながりを見ることができます。花嫁は花婿に迎えられ、めでたく結婚式を終えたその夫婦は、一般的に言う新婚旅行、ハネムーンとして、七日の間完全に「二人っきり」で暮らすことが定められていました。その間は誰であろうと二人に会うことが許されません。イエシュアは天の御父のもとから「迎えに来られる」花婿ですから、当然この花嫁との「二人っきり」の時間は地上ではなく「天」において行われます。先ほどの「場所」マーコームが創世記 1:9 で、地から分けられ区別されて一所に集められたことを指し示していると述べました。ですからイエシュアが弟子たちのために備えられる「場所」はこの地上にはなく、御父のおられる所、すなわち「天」にあると考えられます。つまりイエシュアが弟子たちのために、イエシュアを信じる者たちのために備えられる「場所」とは、この花婿なるイエシュアと花嫁なるイエシュアの弟子たち、イエシュアを信じる者たち、すなわち教会との「天」における「二人っきりの時間」、ハネムーンのことを指し示していると考えられます。そしてこの出来事は、イエシュアが御国の王として地上に再臨される「地上再臨」の、その前に起こる「空中携挙、空中再臨」という出来事によって成就、実現すると考えられます。この「空中携挙、空中再臨」について次のような御言葉があります。

#### I テサロニケ

4:16 主は、号令と、御使いのかしらの声と、神のラッパの響きのうちに、ご自身天から下って来られます。それからキリストにある死者が、まず初めによみがえり、

4:17 次に、生き残っている私たちが、たちまち彼らといっしょに雲の中に一挙に引き上げられ、**空中**で主と会うのです。このようにして、私たちは、いつまでも主とともにいることとなります。

このように、イエシュアの言われた「神を信じ、またわたしを信じなさい」とは、花婿であるイエシュアが備えられる天の御父の家に設けられた一つの「場所」に引き上げられ、「二人っきり」のハネムーンを過ごす花嫁として迎え入れられるための、この「空中携挙、空中再臨」の時が来ることを信じて待ち望むことであると考えられます。

#### 6. 道

14:4 わたしの行く道はあなたがたも知っています。」

14:5 トマスはイエスに言った。「主よ。どこへいらっしゃるのか、私たちにはわかりません。どうして、その道が私たちにわかりましょう。」

14:6 イエスは彼に言われた。「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれひとり父のみもとに来ることはありません。

「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。」この御言葉は非常に有名ですが、文脈からして注目すべきは「道」です。それが真理やいのちに言い換えられ、深みを増し、強調されていると考えられます。道はヘブル語でデレフ(דֶּרֶךְ)と言います。これが最初に使われるのは創世記 3:24 です。

#### 創世記

3:22 神である主は仰せられた。「見よ。人はわれわれのひとりようになり、善悪を知るようになった。今、彼が、手を伸ばし、いのちの木からも取って食べ、永遠に生きないように。」

3:24 こうして、神は人を追放して、いのちの木への道を守るために、エデンの園の東に、ケルビムと輪を描いて回る炎の剣を置かれた。

エデンの園に植えられた、食べると永遠に生きることができる木の実をならせる「いのちの木」、これに至らせる「道」がデレクです。このように、デレフは永遠のいのちを指し示しています。ですからイエシュアはこの「道」を永遠に変わらない「真理」そして「いのち」と言い換えられたのだと考えられます。またこのデレフと同じ綴りでダーラフ(דָרָף)「踏む、歩む」という動詞があります。これが最初に使われるのが民数記 24:17 です。

#### 民数記

24:17 私は見る。しかし今ではない。私は見つめる。しかし間近ではない。ヤコブから一つの星が上り、イスラエルから一本の杖が起こり、モアブのこめかみと、すべての騒ぎ立つ者の脳天を打ち砕く。

これは預言者バラムがイスラエルの民を祝福し、これに敵対するモアブ人やアマレク人などを呪って預言した一文です。ここでヤコブから一つの星が「上り」(新共同訳では「進み出る」)と訳されているのがこのダーラフです。ヤコブから出る一つの星、イスラエルから起こる一本の杖、それがイスラエルに敵対するすべての者を打ち砕く、ダーラフはその一つの存在を指し示しています。それがやがて来られる王なるメシア、神様の御子イエシュアであることは間違いありません。このように「道」と訳されたデレフ、そしてダーラフは、イエシュアが永遠のいのちを与え、且つイスラエルの王としてすべての国々を治められる御方であることを指し示していると考えられます。しかしイエシュアはご自分の意志でこれらのことをなさるのではありません。すべてはイエシュアを遣わした御方、天におられる御父である神様のご意志、ご計画によるものです。

#### 7. 父

14:7 あなたがたは、もしわたしを知っていたなら、父をも知っていたはずですが。しかし、今や、あなたがたは父を知っており、また、すでに父を見たのです。」

14:8 ピリポはイエスに言った。「主よ。私たちに父を見せてください。そうすれば満足します。」

14:9 イエスは彼に言われた。「ピリポ。こんなに長い間あなたがたといっしょにいるのに、あなたはわたしを知らなかったのですか。わたしを見た者は、父を見たのです。どうしてあなたは、『私たちに父を見せてください』と言うのですか。」

14:10 わたしが父におり、父がわたしにおられることを、あなたは信じないのですか。わたしがあなたがたに言うことばは、わたしが自分から話しているものではありません。わたしのうちにおられる父が、ご自分のわざをしておられるのです。

14:11 わたしが父におり、父がわたしにおられるとわたしが言うのを信じなさい。さもなければ、わざによって信じなさい。

イエシュアの言動と行動のすべては御父の命じられたままです。それ以上でもそれ以下でもありません。ただ御父が命じられたままを御子は、イエシュアは語られ、またすべてのわざを行われるのです。イエシュアではない、イエシュアの御父こそが見つめるべき存在であり、そしてその御父のご計画こそが私たちが信じ受け



入れるべき信仰の対象なのです。この事実、この真理をイエシュアは何度も何度も言い換えながら、もういつこいほどに繰り返し繰り返し言い続けておられます。

14:12 まことに、まことに、あなたがたに告げます。わたしを信じる者は、わたしの行うわざを行い、またそれよりもさらに大きなわざを行います。わたしが父のもとに行くからです。

14:13 またわたしは、あなたがたがわたしの名によって求めることは何でも、それをしましょう。父が子によって栄光をお受けになるためです。

14:14 あなたがたが、わたしの名によって何かをわたしに求めるなら、わたしはそれをしましょう。「求めることは何でも、それをしましょう」と言われているので、神様を信じればどんな願いも叶うというような誤解をしまいがちですが、ここで語られていることは神様の「わざを行う」ということにおいてです。イエシュアがそうであったように、自分のやりたいことのためではなく神様のやりたいこと、ご計画を表すために、しかもそれはイエシュアが行ったわざよりも大きなものであり、それを行うために「求めることは何でも、それをしましょう」と語っておられるのだと思われます。では私たちは神様のご計画を表すために何を求めるべきなのでしょう。その答えが次に記されています。

## 8. 御霊

14:15 もしあなたがたがわたしを愛するなら、あなたがたはわたしの戒めを守るはずで

14:16 わたしは父にお願いします。そうすれば、父はもうひとりの助け主をあなたがたにお与えになります。その助け主がいつまでもあなたがたと、ともにおられるためにです。

14:17 その方は、真理の御霊です。世はその方を受け入れることができません。世はその方を見もせず、知りもしないからです。しかし、あなたがたはその方を知っています。その方はあなたがたとともに住み、あなたがたのうちにおられるからです。

イエシュアが父に願い求めたもの、すなわち私たちがイエシュアの御名によって御父に願い求めるべきもの、それは、いやその御方は「もうひとりの助け主、真理の御霊」です。この御方は「助け主」とあるように私たちを支配したり、命令したりする御方ではなく、文字通り「助けて」くださる御方です。では何を助けてくださるのでしょうか。勉強や仕事を助けてくださるものではありません。14:15にあるように「わたしを愛する」、すなわち御父を、イエシュアを愛することにおいて、そして「わたしの戒めを守る」、すなわち御父の戒めを守ることに、それらのことができるように助けてくださるのです。ではその真理の御霊は神様を愛することやその戒めを守らせるために、どのように私たちを助けてくださるのでしょうか。ヘブル語から探ってみたいと思います。御霊はヘブル語でルーアハ(רוח)と言います。レーシュ(ר)、ヴァーヴ(ו)、ハット(ח)という三つの文字から成り立っています。

- ・(ר)レーシュは「頭」を象った象形文字です。「かしら、思考、計画」という意味があると考えられます。
- ・(ו)ヴァーヴは「釘、鉤」を象っています。「固定する、吊り下ろす」という意味があると考えられます。
- ・(ח)ハットは「柵」を表しています。「境界、限界という概念から人の歩み、人生」という意味が考えられます。

これら三つの文字の持つそれぞれの意味を合わせてみますと、ルーアハがどのような働きを持った御方であるかが解ります。すなわち御霊とは、私たちの「頭、思考」の中に「降りて来られ」、「人生に関わる」御方であるということです。ですから御霊は私たちの思いや考えに助言を与え、神様のご計画を表すためのものにつながるように、私たちの人生の歩みに関わる、参与して下さる御方となってく下さるということです。私たちのこの小さな頭脳や乏しい知識では、どれだけ考えても神様を理解することは不可能ですから、当然神様の役に立つような働きをすることはできません。しかしそれをできるように助けてくださるのがこの「もうひとりの助け主、真理の御霊」だということです。御霊は私たちの神様に対する理解を助け、それを深めてくださると同時に、私たち人生を整えて神様のご計画のために用いてくださる御方なのです。そして誰よりもイエシュアご自身がこの御霊の助けを受けておられました。イエシュアは、バプテスマのヨハネから洗礼をお受けになられた直後にこの御霊を受けられました。

### ヨハネ

1:32 またヨハネは証言して言った。「御霊が鳩のように天から下って、この方の上にとどまられるのを私は見ました。

ここからイエシュアの公生涯である、神様の国、御国を宣べ伝える働きが始まりました。つまりイエシュアの言動、行動はすべてこの御霊の助けがあってこそのものであったということです。事実この御霊を受けるまで、イエシュアはどんな働きもなさいませんでした。神様の働きをする上で、御霊の助けがいかに必要不可欠なものであるかが解ります。そしてこの御霊の助けを得るならば、イエシュアが「わたしを信じる者は、わたしの行うわざを行い、またそれよりもさらに大きなわざを行います。」とまで言われたように、私たちはイエシュアが地上でなされた働きと同等もしくはそれ以上の働きをすることができるという、驚くべき事実が示されています。御霊は私たちのささやかな信仰生活を支える付属品のような程度のものではありません。この世界を震撼させるほどの恐るべき力を持った御方であるということを知らなければなりません。

### 使徒

2:38 そこでペテロは彼らに答えた。「悔い改めなさい。そして、それぞれ罪を赦していただくために、イエス・キリストの名によってバプテスマを受けなさい。そうすれば、賜物として聖霊を受けるでしょう。

2:39 なぜなら、この約束は、あなたがたと、その子どもたち、ならびにすべての遠くにいる人々、すなわち、私たちの神である主がお召しになる人々に与えられているからです。」

2:40 ペテロは、このほかにも多くのことばをもって、あかしをし、「この曲がった時代から救われなさい」と言って彼らに勧めた。

2:41 そこで、彼のことばを受け入れた者は、バプテスマを受けた。その日、三千人ほどが弟子に加えられた。

これはイエシュアが十字架の死から復活され、そして天の御父のもとに帰られてから、弟子たちによって起こった出来事です。イエシュアはその三年半の公生涯の中で 70 人ほどの弟子を持ちましたが（ルカ 10:1）、ここに記されているのは「一日に三千人が弟子に加えられた」という事実です。単に信じたわけではありません。悔い改めてバプテスマを受け、そして聖霊を受けたということです。私たちの教会を見ても、これがどれほど

すごいわざであるか理解できると思います。これが聖霊、真理の御霊によるわざです。御父は私たちにそのようなものをお与えになっておられるのです。私たちは神様の働きにおいてもっと壮大な願いを持つべきではないでしょうか。なぜならそれだけのことを現すことができる助け主が、天の御父から私たちに与えられているのですから。